

2. 進む開拓と川

今とはちがう明治時代の「十勝川」

環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

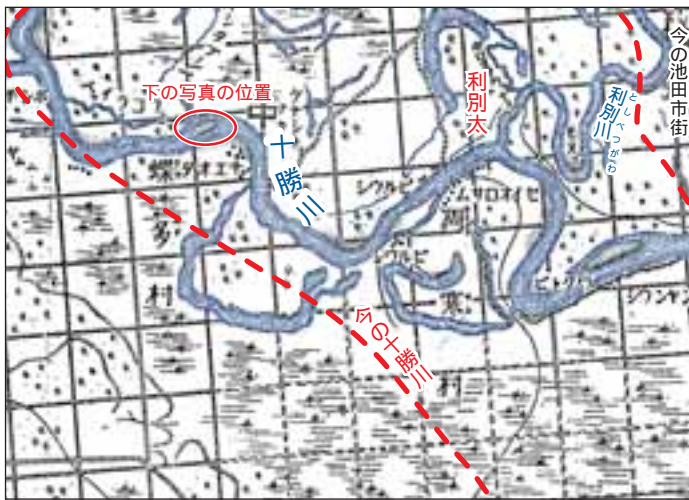
第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展と、そして未来へ

用語

さくいん



明治29年(1896)発行の地形図(80%に縮小。川・沼に着色)による十勝川。今の千代田から利別(池田町)あたり。赤い点線は今の十勝川と利別川。

明治時代の川はほとんど自然なままの流れで、今は大きく異なります。

今よりずっと曲がりくねり、何本にも枝分かれして流れていました。大きな洪水があると、本流の場所が変わることもありました。

流れはあまり変わっていなくても、今とは名前がちがっていたり、同じ名前の川でも今とは全く別の場所を流れていたりすることがあります。

洪水から暮らしを守るために、また、畑や住宅に使える土地をふやすために、流れをよくしたり、堤防をつくったりすることで、人が今の川の形にしてきたのです。



(上)最近の地形図(70%に縮小)。上の明治の地図とほとんど同じ範囲。
(右)旧十勝川の沼。

ずっと池田市街に近かった十勝川

今の十勝川のうち、千代田大橋(幕別町・池田町)から茂岩橋(豊頃町)までの間は、人がつくった「新水路」です。

(p190)

ももとの十勝川は、千代田大橋のあるところから左(東)にカーブしていました。そして今のオシタツ川を通り、旧利別川から礼文内川を通して茂岩に流れていたのです。

また、利別川も今の池田大橋(池田町)より上流で右(西)に大きく曲がって、今の利別南町のあたりで十勝川(今のオシタツ川)に流れこんでいました。そのため、この場所を「利別太(トシベツト: アイヌ語でトウシベツツ: 利別川の河口の意味)」と呼んでいました。

浦幌に流れている方が「十勝川」だった

昭和の中ごろまで、十勝川は旅来(豊頃町)や愛牛(浦幌町)の下流で、今の十勝川と浦幌十勝川に分かれていました。(p208)

このころは、今の浦幌十勝川の方が、十勝川と呼ばれていました。つまり十勝川の河口は、浦幌町の十勝太(トカチプト: アイヌ語で十勝川河口の意味)にあったのです。

そして、大津(豊頃町)に流れている今の十勝川下流は、かつては「大津川(オホツナイ: アイヌ語で深い枝川の意味)」と呼ばれていました。枝川とは分かれた川という意味で、十勝川から分かれた川、ということでしょう。



昭和29年(1896)発行の地形図(40%に縮小・着色)。生剛村(2: 浦幌町)へ向かう川が「十勝川」で、今の十勝川下流部は「大津川」とある。

(このページの地図は、国土地理院刊行・所蔵の1/5万地形図を使用)

1 分かれた川(わかれたかわ): 河川用語では、ある川に合流してくる川のことを支川(しせん)といい、分かれていく川のことを派川(はせん)という。

2 生剛: もとはアイヌ語地名の「オベッカウシ(山尻を川の岸につけているもの)」に当てられた字で、その後、「おべこはし(おべこわし)」、「おべっこうし」と読みが変わり、やがて「せいごう」と読まれるようになった。

かつての川の流れを探す ... よく見ると残っていることも

十勝の川、とくに平野部の川は、そのほとんどに人の手が加わっています。明治時代以前の川のように、全くちがう場合が多いのです。

ただ、もとの流れが全くなっているかといえ、そうではない場合もたくさんあります。

川合大橋（池田町）近くから茂岩（豊頃町）へ流れる「旧利別川～礼文内川」は、かつての十勝川のなごりをなんとか残しています。

また、十勝川支流のメン川（幕別町）は、かつては十勝川の流れであったことや札内川の本流だったことがあります。このように、本流ではなくなったあとも、小川として残る場合があります。

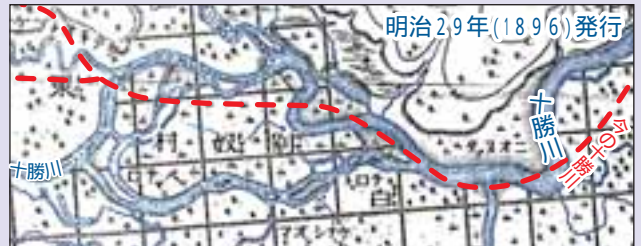
あるいは、今は水が流れていなくなっている、よく見ると地面のくぼみがしばらく続いていることがあります。こうしたところは、川や水路が整備される前の流れのあとかも知れません。

今、家が建っているところでも、かつて川だったところは多いのです。以前に流れがあった場所には、伏流水といって地下を流れる「川」があることもあります。

昔の地図と今の地形をたよりに、身近なところで川のあとを探してみませんか？（古い地形図 p189）



メン川（幕別町・千住11号橋）。かつてメン川は、十勝川に分かれた流れや札内川の本流であった。



昔と最近の、同じ十勝川温泉近くの地形図。明治29年ころには、今のメン川の位置を十勝川（分かれた流れの一つ）が流れている。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

もう少し細かいこと

市町村の境界からわかるかつての流れ

市町村や地方を分ける時（大陸で国を分ける時にも）、川の流れや山（丘）の尾根を境界とすることがよくあります。人の行き来をジャマすることから、区域を分けるきっかけとなるからです。（それ以外の分け方もあります）

ところが、ほとんど川の片側にある市町村なのに、時々、一部が川を飛びこえた場所にあることがあります。

地図で見ると、境界線がその場所だけ川とずれているのです。これは、境界線を決めた時に川が流れていた場所かも知れません。

例えば、幕別町の大部分は十勝川の南側（右岸）にあるのですが、対岸にある道立十勝エコロジーパークにも入っています。

古い地図を見てみると、エコロジーパークにある境界線のところを、かつては十勝川が流れていたことがわかります。この流れに合わせて境界を決めたあと、十勝川の流れが変化して今の流れになりました。

このように、地図上にある市町村の境界は、かつての川の流れを教えてくれることがあるのです。



道立十勝エコロジーパーク近くの地形図。平成12年（2000）発行。エコロジーパーク（□）内に町境界（---）がある。

左と同じ範囲の明治29年（1896）発行の地形図。上の図の境界線のところには、当時の十勝川が流れている。

（このページの地図は、国土地理院刊行・所蔵の1/5万地形図を使用）

3 右岸（うがん）：川の下流に向かって右側を右岸、左側を左岸（さがん）という。